

第3回 和宮降嫁関係史料を読む―「和宮下向ニ付、助郷取極」―

巻島 隆

はじめに

今回は、伊勢崎市図書館所蔵の和宮降嫁関係史料を読みます。

第1回 くずし字に触れる

第2回 読むための基礎知識

第3回 「和宮下向ニ付、助郷取極」(伊勢崎市図書館蔵)を読む

第4回 今井区有文書(赤堀歴史民俗資料館蔵)を読む

第5回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅠ

第6回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅡ

第7回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅢ

第8回 「文久記聞 九」(赤堀恒雄家文書)を読むⅣ

1 和宮親子内親王

ちかこないしんのう 親子内親王 一八四六
―七七 江戸幕府十四代將軍徳川家茂夫人。
仁孝天皇の第八皇女。母は権大納言橋本実久
の女典侍経子。弘化三年(一八四六)閏五月十
日誕生。幼称和宮。嘉永四年(一八五二)七月
有栖川宮熾仁(たるひと)親王と婚約したが、
万延元年(一八六〇)四月に至り、幕府は幕権
強化のため公武一和を標榜して宮の將軍家茂
への降嫁を奏請、再三請願を重ねた上、天皇
の要望をいれて鎖国の復旧を誓約したため、
天皇はついに聴許を決意し、宮も承諾を余儀
なくされた。かくて同年十月幕府の奏請は勅
許せられ、翌文久元年(一八六一)四月宮は内
親王宣下を受け、同年十月京都を発して江戸
に下向、翌二年二月十一日婚儀が挙げられた。
しかし結婚後わずか四年余にして慶応二年(一
八六六)七月家茂に死別、同年十二月薙髪して

小田井 御屋 八幡より三里拾丁
 杏 掛 御泊 八幡より五里三十弐丁
 輕井沢 御屋 杏掛より一里五丁
 碓氷峠 御小休 茶屋 小左衛門
 羽根石 御小休 板倉主計頭領分
 坂本 御泊 杏掛より四里三丁
 松井田 御屋 坂本より弐里
 本庄 御泊 杏掛より四里三丁
 坂本 御泊 杏掛より四里三丁
 新堀村 御小休 大草太郎左衛門知行所
 熊谷 御泊 本庄より五里廿三町
 吹上村 御小休 機三郎
 鴻巣 御屋 熊谷より四里八丁
 桶川 御泊 熊谷より六里弐丁

宏川 庄右衛門 安藤伝藏御代官所
 杏 掛 御泊 半兵衛
 輕井沢 御屋 佐藤 市右衛門
 碓氷峠 御小休 茶屋 小左衛門
 羽根石 御小休 茶屋 小左衛門
 坂本 御泊 三郎左衛門
 松井田 御屋 旅籠屋
 新堀村 御小休 松平下總守領分
 熊谷 御泊 保次郎
 吹上村 御小休 機三郎
 鴻巣 御屋 林部善大右衛門御預所
 桶川 御泊 山太夫

安中 御小休
 板鼻 御泊 坂本より五里十丁
 高崎 前々より 本陣無之候
 倉賀野 御屋 板鼻より三里十三丁
 新町 御小休 伊奈半左衛門御代官所
 本庄 御泊 板鼻より六里三十一町
 深谷 御屋 伊奈半左衛門御預り所
 上尾 燒失 林 八郎右衛門
 大宮 御小休 竹垣三右衛門御代官所
 浦和 御屋 星野 権兵衛
 蕨 御小休 加兵衛
 板橋 御泊 桶川より八里三丁
 上野 御屋 京都より日本橋迄 里數百三拾四里半奈
 又 我拾三宿御泊也

内藏助 伊奈半左衛門御代官所
 喜兵衛 喜兵衛
 松平恭三郎領分 九兵衛
 武藏国 右同断
 右同断 八左衛門
 伊奈半左衛門御代官所 五左衛門
 右同断 左物次
 右同断 十郎兵衛
 右同断 林 八郎右衛門
 竹垣三右衛門御代官所 山崎 喜左衛門
 右同断 星野 権兵衛
 右同断 加兵衛
 右同断 脇本陣 宇兵衛

「和宮様御方御下回御迎并御供名前前御休御休泊割御道中筋宿々御固御大名方御名前前覺」(安中文化会編『中山道安中宿本陣文書』一九七二年)

和宮親子内親王

がすの みやちかこ

果りのなかつた政略結婚の犠牲と
なつて江戸へ降嫁した皇女の悲劇

(弘化三年(明治十年)
二架(七)号)

秋月しのぶ

(作 家)

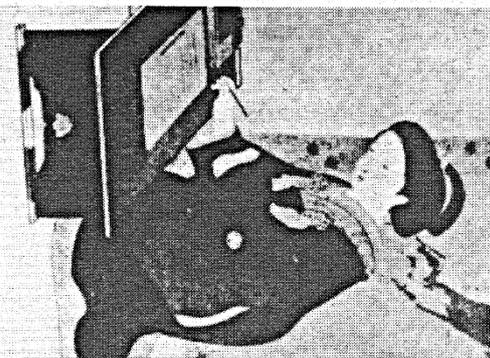
ような淋しい生涯をおくらせなため
に、早々と許婚者をきめたのだが、それ
が悲劇のもとになるとは考えてもなか
つた。
銀行院はまだ一〇代になったばかりの
和宮を、政略結婚の犠牲にするのはあま
りにも痛ましいと、天皇の仰せを辞退し
ている。
だが、私たちのあずかり知らぬところ
で渦巻いていた政争の波が、まだ子供の
俤を残す和宮を呑みこもうとしていた。

皇女の降嫁を幕府が計画したのは、安
政五年(一八五八)ころからで、はじめは
朝廷と幕府の親睦を計り民衆を安堵させ
るとともに、朝廷を統制するのが目的で
あつたが、安政の大獄の終りごろから、
公武合体で傾きかけた幕府の勢力を挽回
し、尊王攘夷派を牽制しようという方針
に変わった。

孝明天皇も初めは和宮の降嫁に反対で
あつた。すでに和宮には許婚者がいる。
妹でも母連いの義理の間柄なので強いこ
とはいえない。年端もいかぬ和宮は真人
と思召、関東へ成らせ候まま……」

和宮親子内親王は六歳の夏、兄の孝明
天皇の思召で、有栖川宮家の一七歳にな
る熈仁親王との結婚の内約を結んでい
る。誕生前に、父の仁孝天皇を失つた和
宮は、生母の観行院の里方、橋本家で育
てられ、一四歳の春に興入れのため、住
み馴れた橋本邸を出て、桂宮邸に移つた。
ところが、宮家との婚儀が間近に迫つ
たころになって、突然、江戸の將軍家茂
に降嫁する話がもち上がった。天皇家に
は和宮の姉の敏宮もいたが、三〇歳の敏
宮では一四歳の家茂にはふさわしくない

のいる関東を大家こわがっている、とい
う理由で、幕府の申し出を断つている。
幕府は七、八年もすれば海防を固め、
攘夷を行ない夷人を追い払う計画である
と、天皇を説得するかわら、和宮の周
辺の人々にもさまざまな懐柔工作を行な
つている。
有栖川宮家には経済的援助を条件に、
婚約解消を働きかけた。その結果、有栖
川宮家では、邸が狭くて、和宮をお迎え
できないとして、興入れの延期を願ひ出
ている。事実上の婚約解消である。誰が
流したのか、有栖川宮家では、丙午の女
は男を不幸にするという迷信を信じ、
内々で丙午生れの和宮を嫌つていたとい



和宮

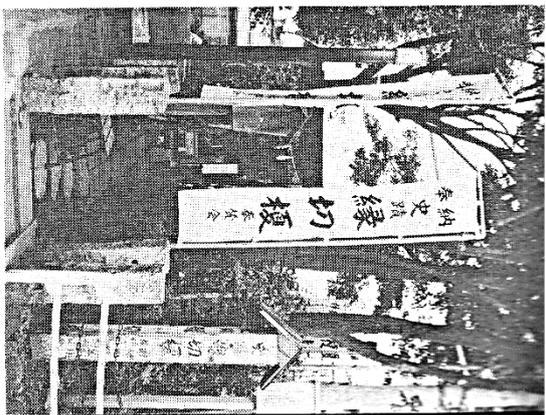
と、同じ年の和宮に白羽の矢が立てられ
たのである。
天皇からの、思いもかけない結婚の勸
めをきいた和宮は、一速に在所の、東人が
沢山いる東へなぞ行きたくない。たとえ
尼になるといへば「やじや」と、母の観行院
を訴えている。
天皇家の娘たちは、皇女にふさわしい
宮家との良縁が求められない場合、生涯
を独身ですごさざるを得ず、尼僧になつ
て門跡寺院を相続する皇女が多かつた。
江戸時代の九代の天皇の皇女七二人中、
結婚したのは一人である。
孝明天皇は妹宮の将来を心配し、尼の

う時も聞かされた。
天皇は思い悩み、公卿の岩倉具視に相
談する。岩倉は、幕府が外国との条約の
破棄を実行すれば、公武合体は天下のだ
め、ひいては朝廷が政権を握る一過程と
考え、降嫁の願ひを勧許すべきである。
と答えた。外国人嫌ひで黒船ノイローゼ
の天皇は、念願の攘夷が実現するためな
ら、どんな犠牲を払つてもかまわなかつた
降嫁に心が動く。
天皇は、もし和宮が承知しなければ
前の年に生まれたばかりのたった一人の
皇女寿万宮を代りに関東へ下してもいい
と考えた。しかし一歳の寿万宮では幼す
ぎて断わられた場合には、退位もやむな
しと覚悟をきめている。
幕府の工作が着々と功を奏し、周囲の
者の説得と圧力、天皇の苦衷に、和宮も
いたたまれない思いになる。何よりも有
栖川宮家の冷たい拒否は、和宮を失望さ
せ、降嫁もやむを得ないと観念するよう
になった。
「御いやすまの御事ながら、お上の御為

東下の道中

文久元年(一八六一)十月二十日辰の刻
(午前八時)、和宮は、唐氏青米毛の車に
乗り、歌書櫃、和琴櫃はじめ数々の調度
品の続く華麗な行列をつらねて、桂宮邸
を出発した。

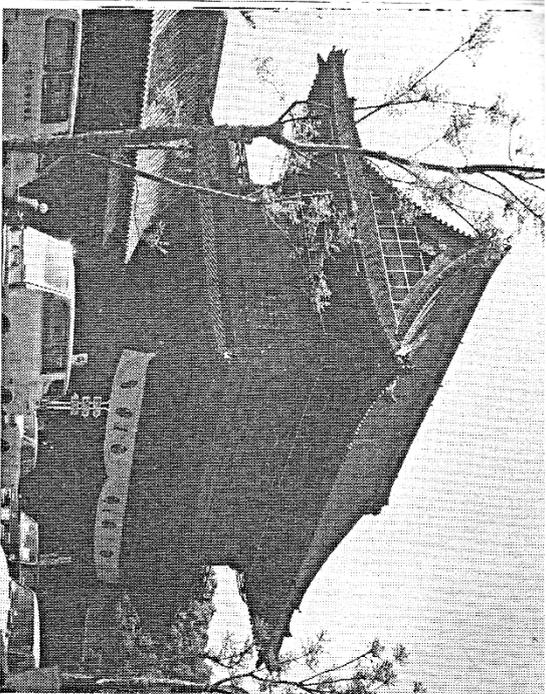
後先例としないことを条件に承諾した。
いる。幕府は拒絶することもできず、今
敏宮のために、邸宅の新造を、願ひ出
て死んで住む所がなく仮住居している姉の
和宮は江戸へ出発する前に、婚約者の
他は一応認められ、降嫁が決定した。
であつたが、江戸下向の時期についての
一名御側として拝信のこと……など
戸城内の生活になじむまで御所の女官を
辺は万事御所の風儀を遵守すること。江
年回忌の度毎に上洛のこと。入興後も身
終えてから江戸に下向のこと。先帝の御
父君仁孝天皇の一七回忌の御陵参拝を
いくつかの条件を出した。
と婚約を承諾したが、入興については



▲板橋宿の縁切榎

尊王攘夷派の志士たちは、この結婚は、幕府が一朝事あるときに、和宮を人質にするための手段であるとして、人心を煽動し、途中で和宮を奪い取る計画を立てていた。行列の警衛は敵重をきわめ、御輿を護衛するもの二藩、沿道の警固に当たるもの二九藩、七八五〇人の未曾有の盛大行列であった。

会ったこともない有栖川宮熾仁親王の婚約破棄をうけた心の痛みを別にすれば、天皇家でさえ収入二、三万石の質素な公家の生活から、徳川七〇万石への興入れは、とほうもない玉の輿といえるのだが、和宮の心は晴れず、すみなれし船路出てけふいく日



▲増上寺

いそぐもつらき東路の旅
と悲劇的になつてゐる。

都を出て二〇日、板鼻の本陣に泊つた和宮は、長旅の淋しさと結婚への不安、わけもない興奮の中で、初潮をみた。満一五歳五カ月の遅い目覚めだった。乳母の藤が手当てをしたが、流れてやまない血の色に、和宮は女の業を感じた。細い肩に、天皇の「天下泰事のため、蛮夷を防ぐことを家茂に堅く約束させよ」という使命を荷なった和宮にとって、わずらわしい女の生理はいそぐもつらき負担となつた。

江戸も間近の中仙道の町外れ、石神井川にかけられた橋の向うに、有名な縁切榎の巨木がある。幕府は縁起をかついで、不吉な呼び名の榎を伏し倒そうとしたが、土地の名木なので、コモで葉一枚見えないように包み、それでもたらず、行列は廻り道をしている。二五百間をついやして、行列は江戸へ着いた。

大行列であった。会ったこともない有栖川宮熾仁親王の婚約破棄をうけた心の痛みを別にすれば、天皇家でさえ収入二、三万石の質素な公家の生活から、徳川七〇万石への興入れは、とほうもない玉の輿といえるのだが、和宮の心は晴れず、すみなれし船路出てけふいく日

大行列であった。会ったこともない有栖川宮熾仁親王の婚約破棄をうけた心の痛みを別にすれば、天皇家でさえ収入二、三万石の質素な公家の生活から、徳川七〇万石への興入れは、とほうもない玉の輿といえるのだが、和宮の心は晴れず、すみなれし船路出てけふいく日

興入れをすませた和宮は、宮と同じ年の、武人というより公達と呼ぶ方が相応しい優雅な家茂に対面している。

政略結婚の果て

文久二年（一八六二）二月十一日、和宮と家茂の婚儀が行なわれた。この日から、和宮は將軍夫人として「御台様」と呼ばれることになったが、あくまで御所風に対面するときも、まず家茂の方から挨拶し、和宮様と呼ぶように改められた。家茂と上段の間、几帳の内に「宮」と呼びかけ

た。武家のしきたりを守るうとする始の天璋院は、皇女としての地位を堅持して、ことごとに対立した。奥女中や側近の侍女たちまで巻きこみ反目あつたので、天璋院は本丸大奥を出て二の丸に移つてゐる。

しかし、家茂は皇女和宮と睦しく暮すとの戦いの陣中で、脚氣衝心で二歳の若い命を終つた。諸外国との交渉、国内の乱れ、江戸城中では嫁姑の争い、そして気位の高い皇女への気遣いに疲れ果てたのだらう。

慶応二年（一八六六）の夏、家茂は長州を回るお百度参りをしている。

慶應二年（一八六六）の夏、家茂は長州との戦いの陣中で、脚氣衝心で二歳の若い命を終つた。諸外国との交渉、国内の乱れ、江戸城中では嫁姑の争い、そして気位の高い皇女への気遣いに疲れ果てたのだらう。

帰らぬ人となつた家茂の遺品の中に、和宮への土産の西陣織一巻があつた。空蟬の唐織ころもなにかせむ綾も錦も君ありてこそと和宮は冥悼の和歌を捧げている。それからわずかに一〇数日後、兄の孝明天皇が崩御された。

莫大な費用をついやし、無理をかさんだ降嫁であつたが、結果として、幕府側も朝廷も得るものがなく、和宮も、成の未亡人にした、虚しい政略結婚であつたといえよう。